

## [COMMUNION]

WEB: [http://www.nskk.org/](http://www.nskk.org/tokyo/index.html)

tokyo/index.html

E-mail: [comm.tko@nskkn.org](mailto:comm.tko@nskkn.org)

PHONE: 03-3433-0987

FAX: 03-3433-8678

Diocese Office



## 《クリスマスメッセージ》

## 冒険への招き

司祭 ヨセフ 太田 信三



アドヴェントの元のラテン語、アドヴェントウスⅡ「到来」は、アドヴェンチャーⅡ「冒険」の語源です。今いる場所安全なところから旅立ち、危機に出会い、自分のそれまでのあり方、殻が破られ、新しい価値観、新しい世界と出会うのが冒険です。何故アドヴェントがアドヴェンチャーになったのでしょうか。それは、神が御子の御降誕を通して、ご自身のそれまでのあり方を破り、この世に降って来るといふ冒険をなさったからです。そしてこの期節の礼拝で聴くみ言葉は、この神の冒険に招かれ、自らも冒険へと出かけ、幼子イエスに出会う人々の物語です。マリア、ヨセフそれぞれが冒険に身を投ずることで、御子は誕生します。罪人同様とされていた羊飼いの外に置かれた異邦人であった博士たち。そんな彼らに御告げがあり、彼ら

は出かけていきました。彼らは、「まさか、こんな自分のために…」という思い、殻を破り、「私たちのために救い主がお生まれになった!」ということを感じて出かけ、その冒険の先で御子に出会いました。

コロナ禍にあつて、教会は歩みを新たにする時を与えられています。この時、あらためてアドヴェントの物語が響いてきます。私たち教会がこれまでのあり方、殻を破る冒険へ出かけるよう促されているように聴こえてくるのです。それは、神と出会う冒険です。自ら冒険に出られる神は、教会の中にだけ収まることはありません。ご自身が創られた世界の隅々で、すべての命のために、今この時にも働かれています。教会が建てられている地域、私たちが生活している地域には、

貧困や孤独の中で生きている人がいます。神はその人と共におられます。そして、社会には良き思いに満ちた人が沢山います。良い思いはすべて神から出るものです。ですから、そのような人や働きと出会い、関わることで、私たちはあらためてこの世界に神を見出すことができます。ですから、出かけていきましょう。どこに行けばよいのかわからないなら、たとえば、地域の社会福祉協議会や役所に問い合わせれば、NPOや地域活動情報を得ることが出来ます。それから、気になるところに連絡し、実際に外かけてみると、そこから繋がりが生まれます。また、近隣の施設や教会の働きを調べても良いかもしれません。出かけることが難しい方は、地域の方々や働きを覚えてお祈りすることが出来ます。あらためて祈りの力を信じて祈ることもまた、冒険です。

一つひとつの教会は、神が

その地に必要だからこそ、神が建てたものです。私たちはその地で果たすべき務めがあるからこそ、神によってそれぞれの教会へと招かれていきます。コロナ禍で迎える2度目のクリスマス。神によって招かれて信じて、冒険に出たクリスマスの物語の登場人物たちのように、私たちも今、あらためて自分が招かれていることを信じ、冒険へ出かけようではありませんか!その先に、神が満ち満ちた世界が広がっています。

(東京聖テモテ教会牧師/東京諸聖徒教会管理牧師/教区事務所宣教主事)



## 追悼 主教竹田 眞師父

さる9月13日に天に召されました竹田眞師父の追悼特集をお送りします。  
師父は聖公会全体の発展のために、神学院の校長を長年務め、その後東京教区の主教として女性司祭の実現に尽力されるなど常に時代をリードしてこられました。  
今回、4人の方々に追悼文をご寄稿いただくと共に、竹田主教様の退任時の文章を掲載させていただきました。  
あらためて、師の魂の平安をお祈りいたします。

**あー、逝かれてしまった。お疲れさまでした。有難うございました。**

主教 五十嵐 正司

竹田眞主教の逝去の知らせを聞いた時に、つぶやいた言葉です。遺された者の寂しさを覚え、牧会者として多くの重荷を負ってくださった竹田主教を想い、励ましてくださった主教の声を思い出しながら感謝しました。

竹田主教は「マコちゃん」「マコちゃん」と親しみを持って多くの人から呼び掛けられていた人であり、私にとっても安心して相談できる大切な先輩聖職でした。司祭として牧会に行き詰まり、落込んで竹田主教に電話をしたときに、主教は私の思いを理解して、適切にアドバイスをしてくださり、また私が九州教区主教に選出されたとの知らせを受けて、心身ともに揺れ動く程に困惑したとき、

竹田主教は私の思いを理解し、落ちていて、明るい声をもって、支えてくださったことを思い出します。

2000年に開催された日本聖公会総会における竹田眞首座主教の姿を印象深く思い出します。背広にネクタイ姿で議長席に着いたのです。幾分か緊張した面持ちで、議事を淡々と進めていました。休み時間には竹田主教を親しく知る人が近付き「竹田主教さん、とても綺麗なネクタイですよ。でも、今日は主教のカラーを付けて議長席に座って欲しかったのです。」と言われたのです。

朝の聖餐式を終えた懇談のとき、数人の聖職との立ち話の中で竹田主教は「私はロー・チャーチだ。」と言われたのです。歴史的三聖職位を継承するカトリック主義と礼拝を中心とする信仰生活を強調する所謂ハイ・チャーチの信仰生活に対して、所謂ロー・チャーチと称さ



れる信仰生活があります。1799年に英国で創設された教会伝道協会(The Church Missionary Society) C.M.S.の教会形成から影響を受けた信仰生活です。C.M.S.は聖書を重視し、すべての信徒が自ら聖書を読み、神の言葉に触れるように努めていたと言われています。

伝道は現地の補助者を養成し、彼らに聖書研究会、洗礼準備などの簡単な信仰生活の指導をもさせて行っていたと言われています。C.M.S.の信仰生活は信徒が様々な役割を引き受けています。教会の中心はイエス・キリストであることは言うまでもないことですが、信仰生活の基礎は信徒であり、信徒が礼拝し、信徒が伝道し、信徒が教会運営をする。日本聖公会祈禱書に記される教会問答29「信徒とは何ですか」の答えの一文「与えられた賜物によって、この世でキリストの和解の業を遂行し、教会の生活と礼拝と運営に責任

を負う者です。」を思い起こします。聖職中心になりがちな日本聖公会に警鐘を鳴らすかのように、背広にネクタイを着けて信徒と同じ服装で議長席に座った竹田主教の意思表示は衝撃的でした。

今は溢れるほどの神の祝福の内に憩う竹田主教を思いつつ、主の御許での再会の時を楽しみにしています。

**常に基本に、原点に立ち返れ**

主教 高橋 宏幸

9月13日(月)の朝、悲しい報せが私たちの中を駆け巡りました。91年に及ぶこの地上でのご生涯に大きな区切りをつけられた、ヨハネ竹田眞主教様の訃報でした。

遺影を拝見しつつ、在りし日のことが溢れ出てきます。はにかんだ表情でふとおっしゃるジョークやおとぼけ、的を射た言葉、大切なポイントを見極められる鋭さ等々、鮮明に浮かんでいきます。長く神学教育に献身され、聖公会神学院の改革に努められたという教育者、神学者としてのお働き、幾つもの教会での管理牧師として牧会者としてのお働き、第7代東京教区主教、第15代首座主教として幾多の課題に取り組みされても

いらっしやいましたことは、私たちの良く知るところです。

私事になります  
が、38年程前、神学生  
の頃のことでした。「君たちね、キリスト教は4世紀で終わったよ」と何の前触れも、その後の解説もなく一言ぼつりと言われたことがあります。驚きを超え、聞き間違えかとさえ思いました。

「4世紀で終わった」ということは、今のキリスト教はキリスト教ではなくなってしまうのだろうか？」「では、今20世紀を生きている私たちは？」と戸惑い、不安さえ感じさせられたものでした。あの時言われたことの真意が分かるようになつていくには、かなりの時間を要しました。その間、「本気で言われたのだろうか？」「我々神学生を煙に巻こうとでもされたのだろうか？」「いつものジョークだったのだろうか？」と様々な想像や思いが胸の内を去来しました。

しかし、その後折々の竹田主様



の言葉を重ねていく中で、その真意とは「常に基本に、原点に立ち返れ」というものであり、それはキリストのご生涯と十字架であるということでした。凄まじい勢いで移り変わる世の中、世俗主義の中にあつて常に私たちキリスト者が大切にし、また立ち返るべき原点とはそこであるとの教えと導

あつた言葉に込められた竹田主教様の信仰告白とも言える言葉でした。想い出は尽きませんが、その中のもう一つに、主教受諾を決議された時の切っ掛けとなつた竹田鐵三司祭に言われた「たかが主教じゃねえか」という言葉を何度となく嬉しそうに話していらしたことです。もちろん、その一言で全てを決意されたとは思いませんが、後に書かれた言葉が浮かびます。それは、ペトロの靈性についてです。「ペトロは十字架へと進まれるイエス様に、自分の意志でイエス様のためなら命を捨てると断

言いますが、この断言を守ることは出来ませんでした。さらにサタンよ、引き下がれとまで言われ、その後も何度も失敗しながらも、主よどこへと問いつつイエス様の後に従いました。そこにはもはや自分の意志ではなく、イエス様の霊（聖霊）とペトロの霊が呼応していました。臆病で軽率なペトロがイエス様に従い得たのはペトロの意志ではなく、聖霊の促しに応えていったペトロの靈性です」というものです。竹田主教様の心の内を垣間見させていただいた言葉に思えてなりません。

主よ、世を去つた主教ヨハネ竹田眞師父の魂が、主の憐れみによって安らかに憩うことができますように

アーメン

### 先を常に見つめられた方

司祭 笹森 田鶴

およそ30年前、まだ女性が日本聖公会で司祭志願が出来なかつた時代に、その実現のためにさまざまにリーダーシップを取ってくださったのが当時の東京教区主教でいらしたヨハネ竹田眞主教でした。

世界の聖公会で初めて女性で主教になられたバーバラ・ハリス主教（当時アメリカ聖公会マサチュー

セッツ教区補佐主教）がオーストラリア聖公会の女性の主教按手の説教者として招かれた折、ついでに寄つて行つてくれないかと頼んだとおっしゃつて、最大級のおもてなしで東京教区にご招待をされたことは特筆すべきことです。1990年、女性の司祭志願が総会で認められる8年も前のことでした。そして聖公会神学院における竹田眞主教とバーバラ・ハリス主教との共同司式による聖餐式という歴史的な出来事が実現していくのでした。ハリス主教の滞在中、靴持ちをする様にと竹田主教に申しつかり、貴重な経験をさせていただきました。

竹田主教は女性の司祭按手への道が開かれるべきことを明確に意思表示されていきました。それが故に多くの批判や中傷もあつたことでしょう。女性の司祭按手の賛成者は日本聖公会では当時はまだマイノリティだったからです。けれども決して変わることもなくそのご意志を貫いてくださいました。それによって、困難や痛みを伴いながらも、祈りと連帯に包まれた中でこの運動は継続されていきました。そしてついに1998年日本



聖公会総会において法規の司祭志願の要件から性別条項が削除される決議がなされ、その後の女性たちの司祭志願への道が開かれることとなります。山野繁子司祭と共に与った1999年顕現日の司祭按手式で、竹田主教がわたしたち二人を両腕に抱えてとびきりの笑顔で喜んでくださったことは今も忘れられません。

その他にも、信徒奉事者をはじめめとする信徒の働きの重視や若手（年齢だけではなく按手順も含め）聖職の積極的な起用、また長年の期待の実現としての宣教主事の設置、また多くの信徒、聖職との協議などを経て策定された東京教区宣教方針の決議や組織改革など、

数えきれない教区の具体的な課題に着手されていきました。同時にそこに多くの人々が参与している道筋を大事にしてくださいました。

いずれも固定化した組織や職制の持つ弊害を信仰共同体が容易に持つてしまうことへ、常に預言者的な視点を向けての竹田主教のお働きでありました。しかもそれらの働きは自分たちのものでは決してなく、あくまでも神の働きに自分たちが参与していることであり、奢ることなく神と人とに仕えることの重要性も語り続けてくださいました。今もなおわたしたちは竹田主教に教え問われているように思います。

教区事務所スタッフや聖職たちへ手料理を準備されているホスピタリティ溢れるお姿や、教区事務所への庭の手入れをされている様子、小笠原聖ジョージ教会主教巡回後の見事に日焼けした笑顔など、多くの瞬間を思い出します。豪快で優しく、時々とぼけてわたしたちを煙に巻き、そして先を常に見つめていらした方でした。出会えたことは感謝でしかありません。竹田主教さん、ありがとうございます。またお会いします。

## 竹田眞主教様を偲んで

渋谷聖公会聖ミカエル教会

山田 益男

過日、沢山の教導を戴いた敬愛する竹田主教様が主のもとに旅立たれた。まず、聖公会神学院の校長時代のことになるが、1970年代の学園紛争の時期、神学院改革が竹田校長主導でなされたことが思い起こされる。従来聖職養成専門であった神学校を聖職志願者でなくても女性であっても学べる



ように門戸開放をなされた。また、私どもの企画した「信徒ゼミ」の趣旨に賛同して、神学院として全面的に支援して下さい、ご自身の他塚田・速水両教授が講師を担当され、きわめて充実した講座が信徒に提供された。旧枠を超える新しい時代の幕開けを感じた出来事であった。

1988年に東京教区主教にな

られ、その年に、東京教区の宣教体制の確立と各教会の前進のためにと称した「しんせい」という小冊子が教区から発行された。この内容は1978年以来、常置委員会、常設委員会で協議検討してきたものであるが、竹田主教は常置委員としてこの働きに指導的立場でかわられてこられた。ご自身が主教となられ、早速この理念の具体化を積極的に進めようとされたのである。祈りと礼拝、献身を通して霊的成長を図ること、教会を宣教協働体として機能させること、私達が福音の証人となって伝道すること、地域社会に開かれ奉仕することなどがあげられている。また、1996年にはランベス会議のメッセージ「福音伝道の10年」を受けて東京教区の宣教方針として「毎日の生活の中で『最も小さい者』と出会い、仕えること」が決定されている。「しんせい」と、この宣教方針は今読み直してもその理念は色あせることの無い正論であるといえる。にも拘わらず教会の規模・活性度は当時の目標に近づいたというよりかえって後退させている現状をみると、心が痛む。私たち信徒は「福音の

## 任期を終えて 感謝の言葉

主教 ヨハネ 竹田 眞 (第7代教区主教)



足かけ13年間の主教の勤めを曲りなりにも終了するに当たって、教区の皆さんの祈りと支えと忍耐を心から感謝いたします。

主教就任が1988年顕現日(1月6日)でした。その年の夏には10年毎のランベス会議の年だったので、西も東もわからない新任主教—ベビービショップ—として参加しました。留学時代の同級生で何人か主教になったのがいて、再会する事が出来ました。思い出話をしているうち、私が礼拝学のゼミでガブリエル・ヒーバートの『典礼と社会』に触れながら日本の礼拝と宣教の問題について発表したのをおぼえてくれた同級生がいました。

このランベス会議で、20世紀の最後の10年を『福音伝道10年』とすることが決められました。主教として、「伝道」と言うことにあまり積極的ではない日本聖公会で、どのようにこのテーマを展開するか戸惑いました。東京教区での宣教課題に靈感を与えてくれたのが、もう古典になっていますが、このヒーバートの名著でした。

今世紀後半から日本聖公会だけではなく、世界中の聖公会で祈祷書の改正が試みられてきました。その改正は、祈祷書そのものの内容や言葉づかい、あるいは礼拝の順序の改正が大部分でした。礼拝と社会との関わりというビジョンに立つ典礼や祈祷書の改革の試みはほとんどなかったようです。

東京教区の福音伝道計画を検討するにあたって、『福音の社会化』という意味での福音伝道を考えました。その社会化の手がかりとして、東京における『もっとも小さい者たち』と出会い、奉仕するプロジェクトを試みることを思い当たりました。このプロジェクトは、神の国に最も近くにある者としての『もっとも小さい者たち』を、社会的弱者として奉仕することではなく、イエスを通して掲示された神の国に私たちをも導いてくれる者として仕えることです。その目標は『この最も小さい者にしたことは、わたしにしたこと…』と語るイエスへの献身によって、神の愛の支配する社会(神の国)のビジョンを教区が共有することです。従って、人間的な善意や同情ではなく、私たちが捧げる感謝と賛美の礼拝こそこの活動を推進する動機にならなければならないのです。私たちが捧げる礼拝は、私たちが『もっとも小さい者』への献身に向けられていなければならないと思います。従って、このプロジェクトが、まず第一に礼拝する共同体になることを目指すこととなります。

主教任期の最後の年の2000年末から2001年初頭にかけて行われた『ミレニウム・ノヴェナ』は、このビジョンを共に分かち合ったと言う意味で私にとってことさらに有意義なものでした。これを企画し、またこれに参加した東京教区の兄弟姉妹への感謝と共に、忘れがたいイベントでした。

ドミネ グラティアス

証人となって伝道する」意識と、いと小さき者へ向ける愛に欠けていたのではないかと。

竹田主教様が在任中に手掛けられた業績としては日本聖公会において女性の司祭按手への道を整えられたこと、教区の組織改革をあげることができた。古き制度が宣教の足枷となるならば、それを変えることに熱心に取り組まれた方であったといえよう。竹田主教様を主のもとに送るこの時、教会が宣教協働体として機能することを重点施策として私たちを導かれたこと、スチュワードシップの励行を呼び掛けられていたことを改めて思い起こしたい。共同体が活性化するためにはその大部分を占める信徒がそれぞれの役目を認識して果たすことが必要であろう。勿論信徒にできることは大きなことではないが、各自ができる働きを担おうという意識が大事であり、それが求められている。東京教区の宣教方針を風化させることなく、我々信徒が聖職者と共にこの働きに取り組んでゆくことが、竹田主教様へのはなむけとなるのではないだろうか。

## 未知なるものへの愛

執事 ヤコブ 萩原 充

2021年10月2日(土)

聖アンデレ主教座聖堂にて執事按手の恵みに与ることができました。みなさまお一人おひとりのお祈り・お支えに大変感謝しております。

執事按手にあたり、わたしはヨハネ福音書21章15節以下の主イエスがシモン・ペトロに言われた「わたしを愛しているか」というみ言葉を思い巡らしながら按手への準備のときを過ごしてまいりました。

リトリートにおいて、

神のみに一日中好きなだけ留まることのできる、祈りのときが与えられますと、まさに「悪魔のささやき」のようなものが聞こえてくるような気がいたしました。絶え間なく考えや思いが湧いてきたり、本を読みたい気分になつたり、スマホで何かを調べた

い思いに駆られたりして、すべてを手放して、ただ神のみに留まることのできない自分がそこにありました。一方

で、神との深い交わりを求めている自分と、もう一方でそこから離れようとしている自分に葛藤しながら過ごす時間が一日中続きました。

それは何故なのだろうと考



えてみると、何もしない、ただ神のみに留まることに対する「恐れ」なのではないかという思いがありました。

ありました。「わたしを愛しているか」という問いは、「わたしの前で、お前が身に着けてきたものをここですべて脱ぎ去って、裸になることができるか」という問いに思えてきました。何かを考えたくなくなる。何かをしたくなるというのは、「何

かをしている」という自分に心地良さや意義を見出しているのではないだろうか。神の目前で、自分のこれまでやってきたこと、身に着けてきたもの、自分の履歴を、すべて捨てることに対する恐れがあるのではないだろうか。何も持っていない自分をさらけ出すことへの不安や恥ずかしさがあるのではないだろうか。

何者でもない、何も持たない裸の自分と神との関係という地平に今一度立つて、これから務めを果たしていくように、確認する機会が与えられたのだとわたしは受け止めます。これまでの自分を手放して、これからの働きにおいて、未知なるものと出会い、

新たな何かを発見し学んでいく。自分のなす結果や成果を愛するのではなく、働きに活力を与えてくれる力を愛する。既知なるものを愛するのではなく、未知なるものを愛するようと、主イエスに言われているような気がいたしました。

## 【司祭の1冊】

### くつやのまるちん

トルストイ原作  
かすや昌宏 絵  
至光社

司祭 上田 亜樹子

トルストイの原作を読んだこともないのに恐縮ですが、クリスマスが近づくと何回でも読みたくなる本／絵本はやっぱこれ。イエスさまがいのちがけで伝えようとしたエッセンスがギュッと詰まっているから、かもしれせん。

マルチンは、年取った靴屋さん。可愛い息子と妻はだいぶ前に亡くなり、半地下の作業場で靴の修理をしてきました。「心の中には悲しい涙がいつぱい詰まっていました」(渡洋子訳)というくだりがあり、もうすでにここでグッと来てしまします。作業場にしたらえた小さな窓からは、行き交う人々の靴が見えますが、唯一の外界の風景とは言え、マルチンには関係のない世界です。

ところがある晩、夢で「明日行くからね」というイエスさまの声を聞きます。半信半疑のマルチンですが、さあ翌朝からは窓の外が気になって

仕方がありません。ふと外を見ると雪かき作業に疲れ、呆然としておじいさんがいます。それまで考えたこともなかったのに、作業場に入ってもらって温かなお茶で持て成します。おじいさんは、心もからだも暖まって帰ってきます。また窓の外を見てみると、雪の中で女の人が赤ちゃんを抱いて震えていました。マルチンは、スープとパンの残りを持って成し自分の上着もあげてしまいます。朝から何も食べていなかったその人ですが、上着に赤ちゃんをくるむと、すっかり顔を挙げて歩き出します。そんな一日でしたが、イエスさまは来なかった、幻想だったのかと落胆するマルチンに、再びその声が訪れます。「おじいさんも女の人も、それからあの人もこの人も、あれは全部わたしだった」と。

社会の中で「不慣れ」状況に置かれた人のところへ、真っ先に行かれ、わたしたちがイエスさまの存在に気がつくのを待っている。そんな誰にもわかるやさしい物語ではないでしょうか。

## ようこそ東京教区へ

## 司祭 プラント・トーマス

この春、英国から参りましたプラント・トーマスと申します。皆さんにも馴染み深い「ウスターソース」で知られる英国中部のウスター市生まれで、1997年にスコットランドのセント・アンドリューズ大学に入学し、西洋古典学を学びました。それから当時の文部省によるJETプログラムにより来日し、2年間にわたり高知市にある高知商業高等学校でALTとして英語を教えていました。この頃に「合気道」と「二刀神影流鎖鎌術」を習っていました。

イギリス帰国後の2004年からは、エクセター大聖堂学校でラテン語と古ギリシャ語を教えました。聖歌隊の子供を夕の祈りに連れて行って、聖公会の伝統的な礼拝を経験して、キリスト信仰の教えを前より深く考えるようになり、エクセター大聖堂で洗礼を受けました。その後、プリストル大学で神学修士の学位を取得しました。そのうち英国国教会に聖職訓練



生として受け入れられ、2008年にはケンブリッジのウエストコット・ハウスで

牧師になるための勉強を始めました。その間、ケンブリッジ大学において親鸞聖人と神学者アレオパゴスのデオニュシオスに関する比較神学をテーマとした博士学位を取得しました。

さらに2012年には聖オバルバンズ修道院で執事に叙任、翌2013年には司祭に叙任されたのち、聖オバルバンズ教会で副牧師、そしてロンドンのカムデン・タウンで牧師として働きはじめ、2017年からはリッチフィールド大聖堂の小中高等学校において、チャプレンおよび宗教学教師として勤務しました。また、その間、バーミングハムにあるニューマン大学で神学を1年間教えていました。現在もケンブリッジ大学プラトン主義研究会のフェローとしての活動を続けており、新作「The Lost Way to the Good」を今年の11月に出版しました。

(立教大学チャプレン)

## 第30回お話を聴く会

障関連の恒例行事の「お話を聴く会」も9月4日に第30回を迎え、無事終了する事が出来ました。

「多くの障がい者を生み出している中東・パレスチナ問題」という標題で東京聖マリア教会の岩浅紀久(いわあさとしひさ)氏にお話をさせて頂きました。

マスコミが報道しない中東という副題がついておりますが、パレスチナ人の所有地である筈のヨルダン川西岸地区においても、至る所に壁が築かれて多くの部分をイスラエルが事実上占領してしまっている事、イスラエルの圧倒的軍事的優勢によって過激派組織と言われている「ハマス」の抵抗など意味をなしていない事、そして激しい空爆によって多くの命が失われ、多くの「障がい者」、「障がい児」が生み出されているのを知ることとなりました。

「お話」の中では「障がい児」が健常の子どもたちと一緒に施設の学校で学んでいる様子

なども語られましたが、大筋は中東・パレスチナ問題であり、この点、「障がい者」自身や親御さんなど密接な結びつきのある方からの「お話」が多かった従来の「お話を聴く会」とは違った雰囲気のものとなりました。しかしながら、Zoomでの行事にもかかわらず、会場全体の支持と共感が得られたことは雰囲気でも伝わりました。

分かち合いの時間では、イスラエル支持派のクリスチャンの方から強烈な意見が寄せられ、会場全体が緊迫感に包まれました。

「お話」の中でも、キリスト教福音派がイスラエルを支持していることが語られていたのですが、まさにそのようなことが「お話を聴く会」の中で起きました。そのような意見が出ることを全く予想していなかったため、非常に困惑しましたが、世界の対立状況が「お話を聴く会」で表面化した思いでした。

「障がい者」関連活動連絡会  
鶴飼良機

## 《信徒リレーエッセイ》

## 未来に繋ぐ

清瀬聖母教会  
菅浪敦

当教会が、ほかとは違うところ、それは、カトリック教会よりもカトリック的な聖堂にある。聖堂の扉を開けると、正面には等身大の十字架像が圧倒的な迫力で、非日常空間に我々を引き込む。十字架の前に佇むと、まさにゴルゴダの丘にたつキリストを見上げる形になる。

先人たちが、この非日常空間で主日に集い、祈ることを望み、こういう古典的な聖堂になった。この聖堂を建てた先人たちも多くの世を去り、また、コロナ禍で十字架の前に集い、祈る事もめっきり減った。

先人たちが願い、創り上げた荘厳な空間での重厚な礼拝。これを我々は未来に繋げることが出来るだろうか。10月初め、我々は新たに6人の堅信受領者を得た。大いなる喜びである。大切にしていきたい。

新たな一歩

東京諸聖徒教会

榎谷 雪

東京諸聖徒教会は今年、新しい宣教体制にむけての一步を踏み出しました。

2015年に惜しまれながら閉園した諸聖徒幼稚園、その同じ場所で「学童保育と放課後等デイサービス」という、地域の子どもたちのための新たな働きを担うために、このたび慣れ親しんだ園舎を建て替えることにしたのです。(開設は2023年4月を予定)

この決断に至るまでの道のりは、決して楽なものではありませんでした。園舎の老朽化と幼稚園の閉園とが、私たち信徒の上にと暗い影を落とす、学生寮、駐車場、認定こども園、保育園……様々な形で再生の可能性を探るも、どれも実現に結びつかず、このまま古びた建物といつしよに教会そのものなくなってしまうのではないかと、そんな不安に駆られる一方で、このままでは絶対に終わらせない、という強い願い

も持ち続けてきました。

2019年、同じ文京区内の東京聖テモテ教会との協働が始まり、そこから自然発生的に、文京区の課題に取り組み合同ワーキンググループ(ぶんきょう いもづーる)が生まれると、二つの教会とその周辺の人たちを巻き込んだ話し合いが始まり、様々な人との繋がりが生まれる中で、学童保育と放課後等デイサービスに出会いました。

振り返ってみると、自分たちだけの利益や心の平安を追求している時はうまくいかなかったのに、地域に必要なことは何かと教会の外に目を向けたとき、道が開けて様々な繋がりが生まれました。そして、外に目を向ける気になったのは、諸聖徒一人ではなく、テモテが共にいて自分たちのこととして一緒に考えてくれたからなのです。

少し遠回りをしてようやく辿り着いたこの道。平坦な道ではないかもしれませんが、前を向いて堂々と歩いていきたいと思えます。

パワーシフトキャンペーンの動き 聖ペテロ教会の取り組み、その先へ

阿佐ヶ谷聖ペテロ教会

前島 恵

「東京教区パワーシフトキャンペーン」の呼びかけが始まって半年がたちました。このキャンペーンに添えて活動した聖ペテロ教会の取組みを紹介します。

聖ペテロ教会では、早速ワーキンググループ(司祭と信徒3名)を作って活動を始めました。毎月の教会委員会に提案書、売電会社の選び方、料金試算などを提示し、了承を得た後、10月中旬シフトの手続きを開始しました。今年中には手続きを完了する予定です。

次はこの切替えを信徒の家庭へ広めるために活動を開始しています。広報誌「みわざ」を通してパワーシフトの必要性について理解を得、行動を促したいと考えています。全家庭がシフトするのは現実的ではありませんが、自然エネルギー、再生可能エネルギーで出来た電気を使うことは、地球とそこに生きる人間だけではない生物の未来を

気候危機から救う貢献の一つです。日本でも未来の地球環境への危機感から若い世代が声を上げています。

今秋9月に東方エキュメニカル総主教バルトロメオ、ローマ教皇フランシスコ、カンタベリー大主教ジャスティン・ウェルビーによる「被造物保護のための共同メッセージ」が出されています。このメッセージはパワーシフトに限定することなく、「被造物保護」が喫緊の課題であることを伝えています。

目を広げれば、国連の提唱するSDGsの活動もパワーシフトに関係があります。17項目の内、No.7はエネルギーをみんな

なにそしてクリーンに、そしてNo.13は気候変動に具体的な対策をです。読者の皆さんの中にはご記憶のある方もおありでしょう。コミュニケーション第57号(2020年4月発行)「なぜ聖公会はSDGsに取り組むのか」の記事も、ご参照ください。

少し飛躍する感じはあるかもしれませんが、このキャンペーンはパワーシフトにとどまらず、キリスト者の使命である「神と人とに仕える」活動そのものであると言えるでしょう。

次回 イースター号

2022年4月17日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア (五十)

1. イルミネーション

信徒A「昨日、うちの牧師が教会のイルミネーションを飾ろうとしたら転んで怪我したらしいよ」

信徒B「なるほど、イルミネーションより前に自分が転倒(点灯)したわけだ」

2. クリスマス・プレゼント

信徒A「もうすぐクリスマスなので、妻にプレゼントをしようと思い、何かほしいものはないか、と聞いたんだ」

信徒B「それで何がほしいって言われたんだい」

信徒A「もっと、しっかりしてほしい、だって」

3. 神さまはどこにでもいる

子ども「ねえ、パパ」

パ パ「なんだい」

子ども「神さまはどこにでもいるんでしょ」

パ パ「そうだね」

子ども「だったら、お寺や神社にもいるの」

パ パ「たぶん、いると思うよ」

子ども「だったら、教会とどんな違いがあるの」

パ パ「うーん、ホームとアウェーの違いかな」